

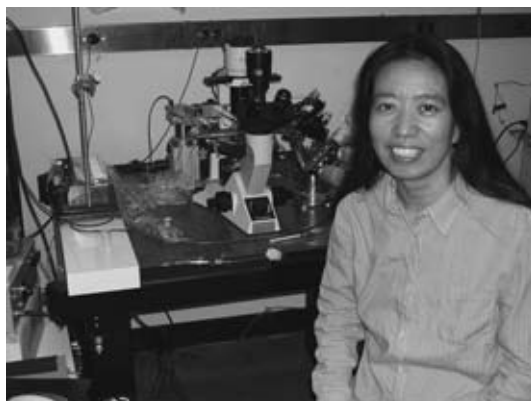
HELLO PSJ

アメリカでポストクとして感じたこと

南イリノイ州立大学 医学部 鈴木恵理香

私は現在南イリノイ州立大学医学部薬理学研究室の Amy Arai 研にポストクとして勤めています。当医学部はアメリカ中西部イリノイ州の州都スプリングフィールド市にあります。一応州都ではありますが、街の規模は小さく郊外に出かけるとトウモロコシと大豆畑が広大に広がります。古い映画ですが、ケビン・コスナーの Field of Dreams (映画の舞台は隣のアイオワ州) が思い浮かびます。そのため日本ではめったに見られない地平線から上る朝日と地平線に沈む夕日が雄大に堪能できるようなところです。当市の周辺は特に日本人が少なく、当市の人口 112,000 人に対し日本人は 7~8 人です。私がこちらに来た当初は、まるで否応なく英語圏の生活に投げ込まれたようなものでした。しかし、今ではこちらの生活にも十分慣れて初めの試行錯誤の経験もアメリカでの収穫の一つと思っています。

私が所属している Arai 研は、主に synaptic transmission における AMPA receptor の内在性分子または薬物による modulation のメカニズムに興味を持っています。詳細は <http://www.siumed.edu/pharm/faculty/Arai/AraiLab.htm> を参照してください。Dr. Arai は AMPA receptor の電気生理学と薬理学について知識と経験が豊富な方です。私のバックグラウンドは神経系の分子生物学でしたが、これからの研究は手法にこだわらず、多角的視点からテーマを突き進めるという Dr. Arai の考え方に基づいて、こちらのラボに参加させてもらいました。現在私はこちらのラボで電気生理の手法を習得し、分子生物学の手法も盛り込んで modulation のメカニズムを AMPA re-



ceptor の kinetics 解析を中心に研究しています。ラボの雰囲気は社交・研究面ともに非常に自由な感じですが、ラボの構成は research assistant 1 人、ポストク 1 人そして大学院生 2 人です。ラボ自体は大きくありませんが、なんといっても Dr. Arai と research assistant でご主人の Dr. Kessler の研究に対する知識と熱意には未だに圧倒される限りです。

さて、今回の寄稿では私がこちらで仕事をしてきて感じていることを二点ほど挙げておきたいと思います。はじめはアメリカでのポストクの立場について、もちろんこれは明らかなことですが、一人前の研究者として考えられます。そしてアメリカのラボは自分たちで研究資金を稼がなくてはならないので、もちろんポストクも研究資金の稼ぎ手と考えられます。ただし、アメリカ人以外のポストク (たとえば J1 や H1 ビザ保持のポストク) の場合、ビザの関係で応募できるグラントが

かなり限られてきます。そして応募資格に関してポストドクとしての在籍年数に制限があります。たとえば、NIHをはじめとする大きなグラントのPIにはアメリカ国籍または永住権が必要になります。私の知っているところでは、J1 や H1 ビザ保持のポストドクが応募できるグラントにAHA (American Heart Association) のグラントがありますが、グラント獲得の段階でポストドク在籍年数5年以内の規定があります。これは私の経験からですが、いろいろな制限を考慮して、まずポストドクとしてアメリカにきたら2年目くらいで何らかのグラントに応募するのを試みてみるべきでしょう。グラントを獲得すればもちろん自分のCVに業績として載せられます。研究グラントでなくても、学会が提供するawardなどは比較的簡単に獲得できます。たとえば、昨年私はSFNのtravel awardを獲得しました。自分の業績で自分の旅費を賄って、小さいものですが自信になりましたし、これもアメリカでは立派にCVの業績のひとつとして挙げられます。アメリカではポストドクも研究資金の獲得を期待されます。アメリカ留学のポストドクとして自分がどんな研究資金獲得の活動ができるか意識しておくといいでしょう。アメリカではこれは研究者として独立するために重要な一つの条件と考えられます。

次は、アメリカの生物学・医学系の大学院生に日本人学生が少ないと思われることについて。現在、アメリカの大学の学部・大学院ではアジア系の学生の比率がどんどん高まっています。しかし、当医学部大学院生に日本人はいません。なぜだろう？現在の日本の研究レベルは十分高いし、日本での就職とか言葉の問題などを考慮するとアメリカに留学する必要はないのでしょうか。私は大学院に入るときにアメリカの大学院留学も考えましたが、一歩踏み切れずに結局日本で大学院に進みました。今になってみると、もっと早い

段階からこちらの研究現場になれておいた方がよかったです。なぜならば、アメリカで学ぶことはまだまだあるからです。たとえば、アメリカではプレゼンテーション（アピールというべきでしょうか）が重要とされ、話し方やスライドの作り方など日本ではなかなか得られないものがふんだんにあるように思われます。当大学の大学院生は論文セミナーや自分の研究に関するセミナーなど本格的なプレゼンテーションをかなりの数をこなします。これはdepartmentのスタッフのほとんどを集めて行われ、conference roomはいっぱいになります。こうした機会では彼らは訓練されていくのだと思います。アメリカでの多くのすばらしいプレゼンテーションにふれ、また自分の今までのプレゼンテーションを省みて、もっと早いうちに学んでおくべきではなかったかと思っています。このほかの例としては、大学院生でもscholarshipやグラントへの応募が推奨されます。これは、研究者だったらグラントに応募し研究資金を獲得する、という意識を学生のうちから植え付けているようです。日本の学生はかなり高い知識レベルを持っていると思います。その知識を基に学生のころからアメリカの研究現場にふれプラスアルファとして必要な研究者意識を身につけたら、さらに大きく発展していけるのではないのでしょうか。今後、大学院からアメリカで研究しようという日本の若い人たちが増えてくるのを期待しています。

以上は私がアメリカのラボに来て主に感じていることです。在籍している方の大学やラボのシステムによって、異なった意見もあるかもしれませんが、Hello PSJには豊富な数の留学報告が寄せられています。今後海外留学または海外就職を考える方には当寄稿をその中の一つとさせていただき、参考にいただければ幸いです。